



研究班紹介

3. 中国・朝鮮の旧日本租界

大里 浩秋（非文字資料研究センター研究員 / 研究班代表）

中国・朝鮮の旧日本租界研究をメインテーマにした第一期・第二期の活動において、共同研究者各自の関心に基づく調査や研究報告を行い、収集した資料も相当量に上り、取り組んだ関連テーマも多様な広がりを示している。しかし、とくに第二期では各自の研究に委ねる状況にとどまってしまった点もある。第三期ではその点を克服し、資料の整理と現況調査を継続し、これまで足を踏み入っていない沙市や東北の旧租借地や旧鉄道附属地についても調査を行い、その際、現地で日本人が発行した新聞、雑誌類についても分担して調査を行う。また、予定通りには進んでいない朝鮮の旧日本租界についても、基礎となる現地調査を行い、その上で、これまでの研究の締めくくりとなるような共同研究の成果を公刊する計画である。



『訛伝火起』「吳友如画報」上海古籍出版社、1983

研究班紹介

4. 海外神社跡地のその後

中島 三千男（非文字資料研究センター研究員 / 研究班代表）

海外神社跡地に関わる共同研究班は非文字資料研究センターの第2期目から始まったので、共同研究班としては今期が2期目となる。

神奈川大学での海外神社跡地の研究は、2003年の21世紀COEプログラムの共同研究班から始まったもので、途中の3年間の空白期間を除いても、10年の歴史を刻もうとしている。

海外神社そのものの研究はそれ以前から長い歴史を持つが、我々が手掛けている海外神社跡地の研究、すなわち日本帝国の崩壊と共に機能を停止した海外神社の跡地が、その後どのように景観を変化させ今日に至っているのかという研究は、全く私共が新しく切り開いてきた研

究課題であり、今や国内はいうまでもなくアジアを中心に世界的にも神奈川大学の名前と共に大きな注目を集めつつある。このことは、本共同研究班がアップしている海外神社のデータベースのアクセス状況を見ても明瞭であり、非文字資料研究センターは、各国・各地の海外神社研究及びその跡地研究のネットワークの結節点としての役割を果たしている。

今期の3年間においては、未調査の朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）及び東南アジア（フィリピン、インドネシア）地域の調査を行うと共に、データベースを充実・完成させ、さらに、これまでの調査結果を写真集として刊行して、一応の締めくくりとしたい。